

独居高齢者の生活実態について

高齢者が自立できる社会形成に関する研究 その1

○正会員 山下 剛**
正会員 友清 貴和**

1. 研究の目的

近年の我が国における社会の高齢化は急速に進行しており、今後はやがて訪れるであろう高齢社会を展望して<高齢者のためのまちづくり>を進めて行かねばならない。

我々は高齢者の生活実態についてそのメリット・デメリットを究明し、メリットは最大限に活かし、デメリットは最小限に抑え、且つこれをカバーしうる都市・社会・サービス・などを計画せねばならない。

そこで本研究では、高齢者の生活実態をコミュニティとの関連において把握するにあたり、対象を独居高齢者に絞って分析する。

2. 研究の方法

鹿児島県は高齢者親族がいる世帯に占める高齢単身者世帯の割合は29.9%で全国1位であり(平成2年・国勢調査)、独居高齢者に関しては特徴的な地域と言える。

鹿児島市もまた世帯総数に占める高齢単身者世帯の割合は5.7%であり、全国平均4.9%を越えている。(平成2年・国勢調査)

そこで今回は、先ほど実施したヒアリング調査を基に、鹿児島市内在住の独居高齢者についてその生活実態を把握・分析し、今後調査地域を拡大するにあたっての一指針を与える。

3. 調査の概要

3-1. 調査地域

調査対象地域として日常生活においてその生活スタイルに相違が生じると思われる都心部とその周辺部、そして市周縁部の3地域を選定した。【表1】

3-2. 調査対象

調査対象者については先ず鹿児島市役所から各地区の民生委員を紹介してもらい、民生委員から各対象者をランダムに紹介してもらった。

調査は対象者宅を訪問して行い、ヒアリングで得た回答を当方で記入した。

調査実施数は68名、そのうち回答を得られたの

は52名であった。【表2】

3-3. 調査項目とその結果(単純集計)

今回実施した調査の調査項目とその主な結果(単純集計)を記す。【表3】

【表1】調査地域

	地区名	特徴
都心部	天文館地区	商店が建ち並ぶ商業地域
都心周辺部	平川地区	人口増加を続ける産業地域
	西伊敷地区	大型団地の建つ住宅地域
市周縁部	東桜島地区	過疎化の進む農・漁業地域

【表2】調査対象

年齢区分	性別	総数	調査数
65~	男	488	0
	69歳女	3202	9
70~	男	358	2
	74歳女	2778	16
75~	男	389	2
	79歳女	2191	8
80~	男	278	1
	84歳女	1155	6
85歳以上	男	157	2
	女	485	6

調査対象者平均
75.6歳
鹿児島市平均
74.1歳

【表3】調査項目およびその結果(単純集計)

調査項目	回答項目	人数	調査項目	回答項目	人数	
住居形式	持ち家	40	集会参加	不参加	10	
	民間借家	4		老人会のみ	18	
	公営住宅	4		老人会+他会	15	
	持ち家+地代	4		他会のみ	9	
居住年数	0~9年	4	隣人関係	親しい	23	
	10~19年	12		まあまあ親しい	10	
	20~29年	9		あいさつ程度	17	
	30~39年	6		無し	2	
	40~49年	19	友人関係	0人	10	
	50年以上	4		1~2人	27	
独居年数	0~9年	19	3~4人	10		
	10~19年	16	5人以上	5		
	20~29年	7	就業状況	有職	7	
	30~39年	8		無職	45	
	40年以上	2	子供との対面周期	毎日	7	
子供との別居距離	徒歩5分以内	2		週数回	10	
	徒歩15分"	8		月数回	11	
	車30分"	9		年数回	9	
	車60分"	5	数年に1回	2		
	車60分以上	8	独居理由	積極的独居	ひとりで生活できる	6
	県外	6		気兼ねなく何でもできる	7	
消極的独居	今の地域に馴染んでいる	3		子供の経済が苦しい・家が狭い	7	
	子供に苦勞をかけたくない	3		子供に苦勞をかけたくない	3	
	保守的独居	持ち家(本家)だから	6	墓があるから	4	

*1 鹿児島大学助教授・工博

*2 同大学院生

4. 調査結果の分析と考察

独居高齢者の生活実態の特徴を明確に表し、かつ今後の問題点について示唆し得る項目をピックアップし、それらをクロスさせて分析した結果を以下に記し、それぞれの項目について考察する。

4-1. 持ち家率について

鹿児島市における単独世帯の持ち家率は都心部で50%、市周縁部では100%であった。【図1】

この事から一概には言えないものの、都心に近づく程持ち家率は下がり、逆に郊外へ行く程持ち家率は高くなるものと思われる。

これには様々な社会的原因もあろうが、都心部で非一持ち家率が高いのは独居高齢者が持ち家に縛られず、自分のライフスタイルに応じて最も適した場所に、最も適した空間を積極的に手にいれようとしているとも考えられないだろうか。

4-2. 有職率について

職の有無を見ると、都心に近づく程有職率が高くなっている事が分かる。

これは鹿児島市などの地方都市においては都心周辺でないと高齢者の雇用は無く、そのため非一都心部での高齢者の就業はほぼ絶望的であるとも言えよう。

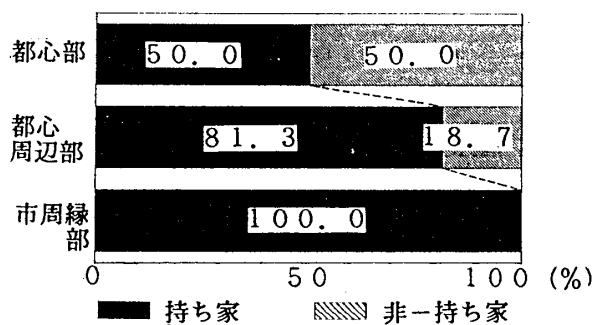
4-3. 子供との別居距離について

都心部では<車行圏内>に100%子供が住んでいるが、より身近なく徒歩圏内>に住んでいる子供は少ない事が分かる。

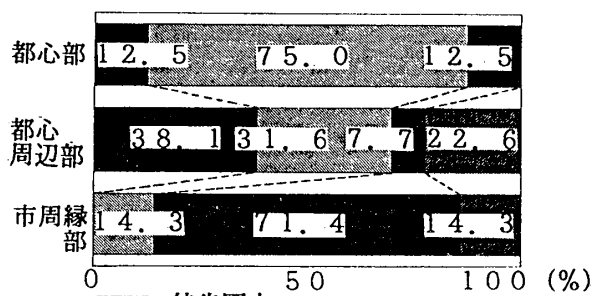
都心周辺部では逆に<徒歩圏内>に子供が住んでいる場合が多く、市周縁部では<徒歩圏内>に住む子供はいなかった。【図2】

また、子供との距離とその面会周期をクロスさせて考えてみると、予想どおり距離が近いほど面会回数は多くなっている事が分かり、「毎日面会する」限界は徒歩15分程度の範囲であり、「週に数回面会する」限界は車で30分程度の範囲、「月に数回面会する」限界は県内在住である事、そして「年に数回面会する」のは県外からである事が考えられる。【図3】

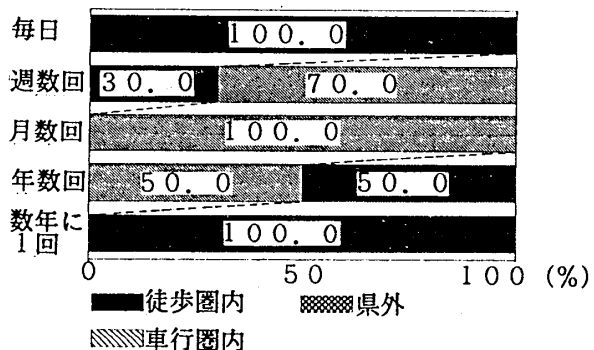
これらの事から万が一の事態になった時の状況を予測すると、都心およびその周辺部では子供との距離の不安を充実した各種施設やサービスがカバーしうるのに対し、周縁部では子供との連絡が困難であるから、緊急時の体制が十分整っているかどうか独居高齢者



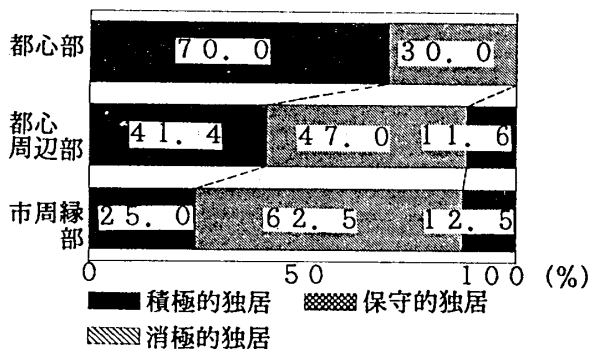
【図1】地域別に見た持ち家率



【図2】地域別に見た子供との別居距離



【図3】面会周期別に見た子供との別居距離



【図4】地域別に見た独居理由

にはより直接的に重要になるものと思われる。

4-4. 独居を選択した理由について

独居を選んだ理由を調査し、独居に対する認識を見た結果、都心部程<積極的独居>であり、非-都心部ほど<消極的独居>である事が分かる。【図4】

これには都心ほど<積極的独居>を支援し得る体制が整っている事、また非-都心部ほど積極的になれないのは<守るべきもの>が多く存在している事が考えられる。

これを子供との面会周期で見ると、周期が短いほど高齢者は<積極的独居>である事が分かる。

この事から子供との別居距離が近いほど独居高齢者は積極的に生きる事ができ、これには精神的な安心感が必要であると考えられる。

また集会への参加状況を見ると、不参加と答えた人のほとんどが<消極的独居>である事が分かる。

次に親しい友人数を見ると、<積極的独居>である人ほど友人は多く、また<守るべきもの>のある人が最も友人数は少ない事が分かった。

もちろん家や墓を守る事がこの直接の原因とは思えないが、意識的なものとしてどこかで高齢者の生活を抑圧しているのではないかと思われる。

4-5. 隣人関係について

隣人との関係を見ると、都心ほど親しいと答えた人は少なく、<隣人関係>は希薄になっていると言える。

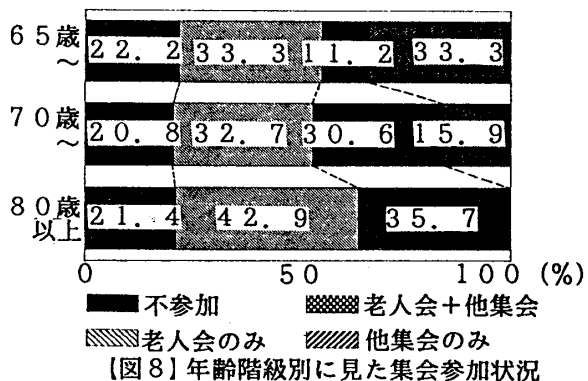
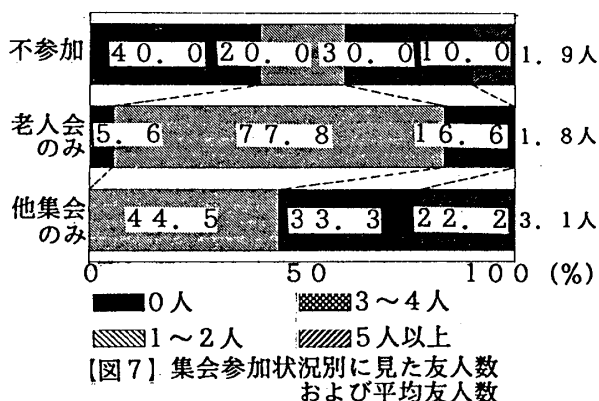
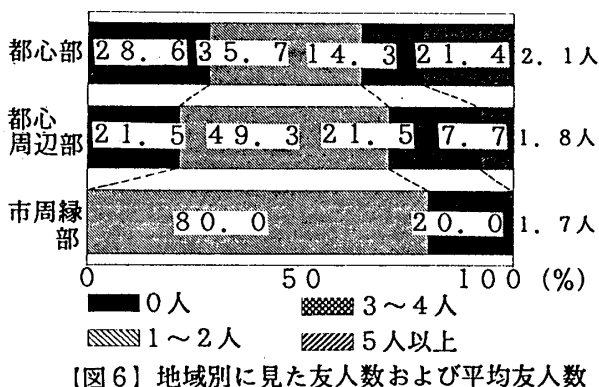
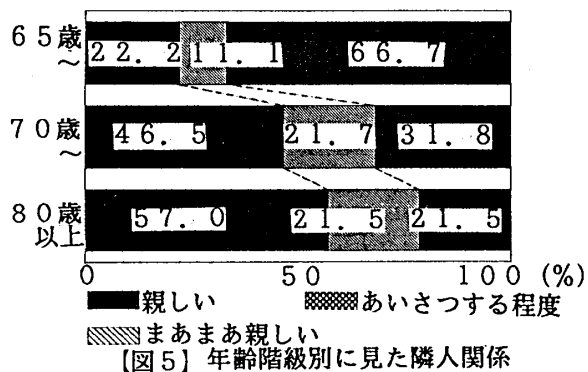
またこれを年齢階級別にみると、加齢とともに積極的になっている事がうかがわれ、隣人との付き合いも深くなっている事が分かる。【図5】

4-6. 友人関係について

親しい友人数を見ると、都心及びその周辺に住む人の20%以上の人がいないと答えているのに対し、この地区の平均友人数は必ずしも低くはなく、むしろいないと答えた人がいなかった周縁部の平均友人数よりも多い事が分かる。【図6】

またこれを年齢階級別に見ても特徴的な事は見いだせなかったが、性別でみると、女性の平均友人数は男性をかなり上回っており、女性の方が友人作りに積極的であると言える。

そして友人数を集会への参加状況とクロスさせて考えると、老人会を中心に参加している人の平均友人



数は不参加と答えた人の平均友人数と同程度であるのに対して、他のサークル的諸会のみに参加している人の平均友人数は目立って多い事が分かる。【図7】

つまり、先の<隣人関係>をあわせて考えてみると、独居高齢者の友人数は<隣人関係>には無関係であり、さらに言えば独居高齢者には<地域的連帯感>よりも同じ趣味を持った人々との交流による<サークルの仲間意識>の方が友人をより親しく感じさせるものと思われる。

4-7. 集会への参加について

集会への参加状況を見ると、都心ほど不参加の人が多くなっている事が分かる。

しかし参加している人の内容を見ると非-都市部では老人会を中心に、しかもそのほとんどが老人会のみに参加しているのに対し、都心部では老人会以外のサークル的諸会に積極的に参加していると言える。

またこれを年齢階級別にみると、年齢に関係なく不参加が20%程度いる事が分かる。

また加齢とともに老人会中心にはなるものの積極的に参加するようになり、80代の40%以上が老人会に、35%以上が老人会に加えて何らかのサークル的諸会に参加している事も分かる。【図8】

また男性の40%が不参加と答えているのに対し、女性は80%以上が参加している事から、ここでも女性の方がより積極的であると言える。

4-8. 日常生活圏について

買い物を行う範囲を見ると、都心部・周縁部での<買い物圏>は徒歩15分以内に設定されており、充実に差異はあるものの独居高齢者はこの範囲内で十分暮らして行ける事が分かる。

逆に都心周辺部は中途半端な位置であるためか、かえって<買い物圏>は広く設定されており、日常生活での不便さとなっている。

4-9. 趣味について

趣味に関して見ると、年齢に関係なく90%の人が何らかの趣味を持っており、趣味をさらに持ちたいかという質問に対しては70%の人が持ちたいと答え、ここでも女性の方がより積極的であった。

また趣味を持ちたいとは思わないと答えた人に対して、その理由を尋ねたところ、年齢に関係なく身体的な理由をあげた人が多く、周縁部ではそのような場

所(機会)がないと答えた人も多かった。

4-10. ライフスタイルについて

1日の生活を把握するために時刻別調査を行った結果、独居高齢者にはその性別・年齢に関係なく、ある一定のライフスタイルがある事が分かった。【表4】

つまり独居高齢者の生活においては「起床」「朝食」「昼食」「夕食」「就寝」という基本的行動は実に規則正しく毎日繰り返されているのである。

だがその一方で、その間々での生活行動は常に決定的ではなく、むしろ臨機応変であり、よって今回の調査は難航し、その典型例はつかめなかったのである。

しかし逆に言えば、この<基本的事項は規則正しく繰り返し、その間の時間は日々自由に過ごす>という実態こそ、独居高齢者の典型的ライフスタイルなのではないだろうか。

【表4】1日のライフスタイル

時刻	規則的行動	不規則的行動			
6:00	起床		14:00		昼寝
7:00	朝食		15:00		TV
8:00		運動	16:00		散歩
9:00		畑仕事	17:00		子と会う
10:00		掃除	18:00	夕食	休憩
11:00		洗濯	19:00		茶飲み話
12:00	昼食	新聞	20:00		縫い物
13:00		散歩	21:00		庭いじり
		通院	22:00	就寝	
		TV			入浴
		茶飲み話			TV
					手紙
		入浴			趣味
		掃除			日記
		畑仕事			縫い物
					電話

5. まとめ

以上の分析、および考察によって、鹿児島市という特徴的な地域においての現在の独居高齢者の概要とそれをとりまく様々な状況が把握でき、また独居高齢者の生活実態が把握できたと思う。

そこには<ひとりであること>をメリットにもデメリットにもし得る様々な外部/内部因子が存在しており、我々は今後それらの<メカニズム>をより詳細に、より精密に把握・分析し、将来の<高齢者のためのまちづくり>に活かして行かねばならない。